

# 看取り介護老健

～家族に囲まれて～



日本では、都市化や核家族化が在宅死を減少させ、1976年以降、病院死は在宅死を上回るようになりました。以前は在宅死が当たり前であったことを考えると、日本人の「死に場所」は劇的な変化を遂げたことが分かります。

「終末期の質」  
デーパーあかねでは、積極的治療は望まず最期をデーパーあかねで迎えたいという方を対象に2009年より看取り介護を取り入れています。しかし、日常生活援助を主な役割としている職員が、看取りに直面する際、不安や戸惑いがあり決して満足のいく看取り介護を行うことが出来ていなかったように思います。

そこで、今年2月より終末期ケア委員会を立ち上げ、委員会を中心に職員研修、看取り指針の作成等を行いました。居室は個室化にして、家族がいつでもゆっくり付き添うことが出来るようにしました。また、医師を交えた臨終時の職員の対応や行動の検証、それを基にマニュアルを作成し、「終末期のQOD(死の質)を考え、家での看取りと同じように家族に囲まれ、残された時間を自分らしく、



<温かな手浴>

そして、苦痛なく安らかに逝くことが出来る」を目標に取り組みを始めました。  
《家庭的な環境で》  
居室には、家族やペットの写真、ひ孫さんからの絵などを張ったり、食べたいものを食べられる物を提供していただきます。家族と共に入浴介助や、亡くなる前日まで足浴や手浴などをして、医療より介護で多くかかわっています。ご家

会」を開きました。  
講演の後半は、介護職員が、看取りに関わっていく中で口腔ケア後、状態が悪くなってしまう場合それが一因ではないかと不安になると質問し、先生は「それは強烈に否定してあげたい。何もしないで迎えるより常識的な範囲で是非やってあげて欲しい」と話されました。日頃から不安に感じていた事を、一つ一つ丁寧に話しをして頂き、看取りケアを学ぶと同時に、職員の心のケアともな

り、有意義な研修を得ることが出来ました。  
このような機会の中で、施設での家族的な環境で人生の最期をお手伝いさせて頂く重さを再確認し、気がひきしまる思いで研修を終えました。  
(老健師長 阪下)



## 父との大切な時間

### 大切な時間

去年末、父の容態が悪くなり迷いもありましたが、あかねで看取りをして頂くことに決めました。

にほんの少し含ませ口にしてあげることができました。また、洗面器にお湯を入れて持ってきてくださり、両手を洗って温めると、父も手をチャプチャプと動かし喜んでいました。

3月に入り、亡くなる一週間前から夜の付き添いをしてほしいという話を頂き、父の横で泊まらせてもらいました。施設では付き添いはできないと勝手に思っていたので、とても有難かったです。

父にはもちろん、残される私達にも思い出作りに協力して頂き、父との大切な時間を過ごすことができました。父が晩年、どれほどスタッフの皆様を支えられ、幸せに人間らしい一生を終える事ができたかと思うと感激に堪えませんでした。

5月22日には、在宅医療の専門クリニック平野国美医師を講師に「看取りケアの研修

また、父が喜ぶ事をしてあげたらと言ってもらい、大好きだったお酒を口腔スポンジ

(娘 齊藤)